

臨床フィールドワークと境界性の心理臨床学的研究

Clinical Psychology about the Clinical Fieldwork and the Boundary

研究代表者：東畑 開人(博士後期課程3回生) 指導教員：皆藤 章
研究分担者：中藤 信哉(博士後期課程1回生)、渡辺 潔(博士後期課程1回生)
長崎 励郎(博士後期課程1回生)、國崎 貴弘(修士課程2回生)
張 善花(修士課程1回生)

〔研究目的〕

本コロキウムはGPの初年度から引き続き行われ、3年目を迎えるものである。すなわち、平成19年度には『宗教』現象に着目した心理臨床に関する研究コロキウム』として、奈良県川上村へのフィールドワークを行い、宗教という視座から心理臨床家によるフィールドワークについて検討を行い、平成20年度には「臨床フィールドワークを用いた心理臨床学的研究」として、隠岐へのフィールドワークを行い、体験という視座から心理臨床家によるフィールドワークについての検討を行ってきた。最終年度である本年度では、「境界性」というテーマを掲げて五島列島へのフィールドワークを行い、そして心理臨床家によるフィールドワークを、広く「旅」として捉えて検討を行った。

このような研究は、心理臨床学が従来焦点を当ててこなかった心理臨床家の姿に着目するものである。すなわち、従来面接室の中での出来事にのみ心理臨床学は焦点を当て、それについての知見を集積してきた。しかし、現代を生きる心理臨床家の営みは、より広く文化を含めた面接室の外部へと向かっている。本研究は、そのような面接室の外部での心理臨床家の営みを検討し、それと心理臨床実践とのかかわりを明らかにするために行われた。

〔研究経過〕

本コロキウムでは、繰返しフィールドワークを行い、そこでの体験についてのディスカッションを繰り返してきた。このとき、狭く体験の内容に拘泥するだけではなく、このような議論を行う自分自身も含めて、それが現代を生きる心理臨床家にとっていかなる意義をもっているのかという広いパースペクティブから検討を行うことに努めた。

このような体験報告が集積される中で、それを研究として論じることの困難さを痛感する時期があった。このときに安易に他の学問領域の知見や方法を用いるという道筋に行くのではなく、実際に心理臨床を実践する心理臨床家が生きるありようから、知を見出すことを目指した。それは突き当たった困難自体の性質がいかなるものであるのかという問題意識をもって、さらなる研究を進めてきたことを意味する。

〔研究成果〕

研究成果として、臨床フィールドワークを「心理臨床家の旅」と捉える立場から研究を行い、その成果を二年連続で心理臨床学会大会で発表を行った。以下に、その内容を要約する。

心理臨床家の旅については、これまでほとんど研究がなされてこなかった。それは心理臨床家の旅自体の持つ本質による。これまでクライアントによる旅は、イニシエーションの文脈でとらえられてきたが、心理臨床家の旅は休養の文脈でとらえられてきた。すなわち、現代人のほとんどと同様に、心理臨床家の旅もまた、余暇・休暇になされる営みであり、それはビジネスとは関係がないものとして捉えられてきたのである。実際、旅はそのようにして再び心理臨床家が仕事をなしていくのに貢献するものである。よって、心理臨床家の旅とは、心理臨床学の範疇で捉えられないということによって、心理臨床家の旅として成立するのである。

しかし、関係を生きる営みである心理臨床実践にとって休養とは一体いかにして可能なのであろうか。不在はそのまま迫害的な母親像であることは、心理臨床学の一つの大きな発見である。この点を明らかにするべく、本コロキウムでは、それぞれの体験報告についてディスカッションをすると同時に、Freud,S.の旅の記録をはじめとした心理臨床家の旅のこれまで公刊されたものを検討することを通して、実際に心理臨床家の旅がいかなるありようでなされているのかについてあきらかにした。

その結果として、心理臨床家の旅とは、恐怖症的なこころの動きを伴うものであり、旅を通して力動的なこころの作業が行われることが示された。このことは、恐怖症が唯一外界の対象をこころの領域に位置付ける病理のありようであることから明らかにされる。そして、恐怖症が回避を特徴としているように、それは心理臨床家がクライアントを回避するというありようで休暇に臨むことと軌を一にしている。よって、心理臨床家の旅とは、それぞれの心理臨床家にとって不可欠なこころの作業であることを明らかにした。

以上を踏まえた上で、最後に臨床の知とはいかなるものであるのかについて検討を行った。そして、自らの体験がいかに無様なものであり、見苦しいものであろうとも、それが事実であることから目を背けずに、そこから学んでいくことにこそ、臨床の知の本質があることを述べた。